

Title	ルーベール著 ルイ・ブラン
Sub Title	Louis Blanc, by Leo A. Louvère
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.1 (1962. 1) ,p.86(86)- 90(90)
JaLC DOI	10.14991/001.19620101-0086
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620101-0086">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620101-0086</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

てすんだわけである。

企業相互の間には対面集团的な結合があるが、消費者は凝集した集団に結合されない未組織の状態にある。企業活動においては競争におくれをとらないためには指導的な企業の行動に附随してゆかなければならず、また顧客を失わないためにはたえず消費者の動向を予測しなければならぬが、これらは企業活動に共通性をもたらしやすい。このため技術革新は急速に普及し、投資抑制政策は容易に成功しない。しかし消費者は通常その期待を現状より少し高い水準に設定し、その楽観的態度の維持にはたえず新しい好条件を必要とし、たといい好況でも同一事態が続くと用心深くなる。消費者は元来根強い保守性を持ち、経済の動きにはそれなりの考えかたをもっていて、十分納得がゆかなければそれを変えようとなし。彼等は意識的に経済を安定させようとするのではないが、彼等が法外な行動をとらないことが、自然とこのような結果をもたらすのである。もちろん企業活動の側がいつも安定を破壊する作用をするわけではないが、大企業の影響下においては極端な統一的行為がおこりやすい。今日の経済が多数の消費者の行動に依存していることは、その動向に不安定をあたるよりはむしろこれを安定させるものであるというのが、この著者の結論である。

(McGraw-Hill, pp. viii, 276, \$ 6.50)

ない。したがってルイ・ブランと、その思想の評価は、ルイ・ブランの政治的実践活動とのからみ合いにおいて、はじめて可能になるであろう。いわば、現実が、彼の社会主義理論の試金石になった。著者ルーベールは、従来の伝記が、彼の思想を、彼の日常活動からきりはなしてのべていることを批判しているが、(Introduction, xi) 上にのべた理由から、この考え方はうなずけるものである。

さて、ルイ・ブランについて、ヘルマン・ペヒアンは、彼をカー・マルクスとフェルディナンド・ラッサールの先駆者とみ、近代社会主義の革新者と考えている。<sup>(1)</sup> さらにマクシム・ルロワは、彼を国家社会主義者とみなしているが、この考え方はかなり一般的である。<sup>(2)</sup> また他方、コールは、近代民主社会主義の先駆者とする。<sup>(3)</sup> これらの考え方に対して、著者は、副題にもあるとおり、ブランを「ジャコバン社会主義者」として規定するのである。ジャコバン社会主義という概念を設定すること、あるいは、その内容に対する批判は別として、次のようにいうことは許されよう。つまり、著者は、ブランの社会主義を、もつともフランス的な思想の伝統の中で理解しようとした、ということである。その際、彼のいう、ジャコバン社会主義という概念が不明確であり、その分析が、余りに政治主義的であることを考えても、なおこのことはいえよう。あたかも、予定されたコースであるかのように、ブランをマルクスや、ラッサールの路線の前に置いたり、イギリス流の民主社会主義の先駆者としてみるよりは、ジャコバンニズムというフランスの伝統の中で、彼をみようとする態度は、ブランをブランが置かれた位置に置いて眺めよう

書評

ルーベール著

『ルイ・ブラン』

Leo A. Louvère; Louis Blanc, his life and his contribution to the rise of French Jacobin-Socialism, Northwestern University Press, 1961, pp. 256.

野地洋行

これは十九世紀フランス社会主義者、ルイ・ブランに関する、新しい文献である。ルイ・ブランはもちろん、一八四八年を主要な舞台として活躍したフランス社会主義者の群星の一つである。

われわれは、すでに思想家としてのルイ・ブランを知っている。(たとえば平井新「近代フランス社会主義の潮流」)しかし彼は単に思想家であるのみならず、実践的政治指導者でもあった。彼は二月革命後成立した仮政府の閣僚の一人であり、仮政府が任命したりユクサンポール委員会の議長だったのである。この時代はすでに、社会主義者を単なる思想家として、書齋の中に安居させてはおかなかった。ルイ・ブランの場合がことにそうであった。「労働組織論」(L'organisation du travail, 1839)の著者として著名な彼は、同時にその理念を現実を検証できる政治的地位にいたのである。この時代は社会主義者を、ただユートピアンとしてだけ評価することを許さ

とする正しい態度であろう。

著者はジャコバン社会主義をもって、ジャコバン民主主義と、協同組合社会主義を結びつけようとするもの、と考えている。(p. 15, 16)だが、われわれにとりて、ジャコバン主義、という概念は、著者が考えているほど、はっきりしたものではない。それを大きくばに、政治的急進主義として理解したとしよう。とすれば、われわれは、思想家であると同時に政治家としてのブランをみなければならず、したがって社会主義思想家としてのブランの評価に、ある訂正を加えねばならぬだろう。ブランは単に社会主義者であるだけでなく、それを政治的急進主義と結びつけていたからである。そして、もし彼のジャコバン社会主義が、著者のいうように、現代フランスの政党の中でも、社会党よりもはるかに右であるといわれる急進社会党の源流の一つであるとすれば、(p. 221-2)社会主義者としての彼の評価は、ますます訂正されねばならぬだろう。(ルイ・ブランの研究家、エドアル・ルナルや、アルベール・ミローはブランをもって急進社会主義の創立者としている。(p. 223))

社会主義思想家としてのブラン、「労働組織論」の著者としてのブランだけでなく、現実の政治指導者としてのブランをみよ、という著者の見地は、結局において、ジャコバニスト、政治的急進主義者としてのブランの姿を大きくクロウズ・アップすることとなった。つまり、政治主義者としてのルイ・ブランの高昇は、事実において、社会主義者としてのブランの下降である。著者は、彼のユートピアの解説よりは、ジャコバンの政治指導者としての彼の活動の追

跡に力をそそいだ。そして著者はプランの平和的改革主義に大きな好意を寄せているにもかかわらず、この追跡は、かえって、プランが近代的な社会主義者としても、また政治指導者としても欠ける所があったことを、証明する結果になったのである。

たとえば、プランが主張するように (pp. 160-1) 二月革命の仮政府が設立した国民工場を含めて、政府の施策の中には何一つとして、プランの社会主義と直接関係するものがなかったとすれば、それは彼の社会主義政治家としての無能力さを自分で認めることになるであろうし、ベネデットがいうように (p. 25) もし、国民工場の設立がプランの責任であったとするならば、その失敗は彼の社会主義の原理が、この時代のフランス労働者にとって、指針になりえないもの、無効なものであったこと、事実上の証明になってしまふのである。これは著者自身みとめる通りである。(pp. 160-1)

かくして、彼を社会主義者ということは許されよう。だが、彼を社会主義の政治家ということはできるだろうか。一度も革命的であったことのないプラン、もっとも決定的な時点において社会主義の為に一度も決定的な行動をとらなかったプラン、(pp. 166-7) パリ・コミューンに反対し、ティエールを支持したプラン (pp. 196-8) をわれわれは政治的に社会主義者とよぶことはできないだろう。(マルクスもまた、パリ・コミューンを時期尚早として反対したが、一度それが実現するや、その熱心な支持者となったことは、よく知られている。このマルクスの態度と、虐殺者ティエールと手を結んだ急進派ルイ・プランの差違は、著者の弁護にもかかわらず (p. 215) まったく明

らかである。

また彼はたしかに政治的には左翼急進派であり、ジャコバンであった。しかし、彼が急進派として政治的にたちあらわれるとき、彼は同時に社会主義的であっただろうか。一八四八年には詩人ラマルチーヌに巧妙にひきまわされたあげく、国民工場の他に、何一つ社会主義らしいものを実現できず、結局は二月革命の果実を、そっくりブルジョアジーの手に渡してしまったルイ・プラン。そして一八七〇年代には、ガンベッタとともに、ティエールを支持し、プランキを排撃したルイ・プラン。一八四八年の六月蜂起の時と同じく、一八七一年にも、パリケードの上での戦いを傍観し、虐殺を容認したプランを、われわれは急進主義者ということはできても、社会主義的政治家ということはできないだろう。

こういうことは許されないだろうか。書齋で「労働組織論」をかいているかぎり、彼は社会主義者であった。だが、彼が実際政治家としてたちあらわれるかぎり、彼は社会主義者ではなかった。と。もし、著者のいうジャコバン社会主義なるものが、このようなもの意味するのであるならば、評者もこの規定に同意するだろう。このようなプランの社会主義に共鳴するか、否定するか、それはもちろん、それから先の別の問題である。とにかく、一人の社会主義者その思想だけでなく、日常の政治活動の中で追跡しようという著者の方法は、このようなプランの姿を浮き上らせている。多分人はここで「フランスにおける階級闘争」におけるマルクスの鋭い批判を想起すべきであろう。

(1) Herman Pechan: Louis Blanc als Wegbereiter des modernen Sozialismus, 1929, pp. 106-28.  
(2) Maxime Leroy: Histoire des idées sociales en France, 1946-54, II, p. 455.

Elie Halévy: Histoire du socialisme européen, 1948, pp. 63-4.  
(3) G. D. H. Cole: A History of Socialist Thought, vol. 1: The Forerunners, 1953, p. 169.  
(4) Edouard Renard: Louis Blanc, sa vie son oeuvre, 1922. Albert Milhaud: Histoire du radicalisme, 1951.  
(5) Gioia-Macchioro Benedetto: "Louis Blanc e la Rivoluzione de febbraio."

II

本書の構成は、彼の一生を年代的に追いつつ、彼の思想の変遷と政治的展開を検討していく方法をとっている。われわれもそれにしたがって興味深い点をひろってみよう。

第三章「民主主義の哲学者」では、彼の国家観がのべられている。しばしば国家社会主義者とさえいわれるように、民主的な基盤の上に立つ有徳の共和国は、労働者の為に組合を組織し、労働者を貧困と競争の悪弊の中から救い出すのである。「我投票す、ゆえに我自由なり」(p. 28) だが、事実はそれほど甘くないだろう。国家は彼の期待を裏切った。そして社会は彼が考えるように、ブルジョアと人民の二つの階級だけではなかった。(p. 24) 中・小層のブル

ジョアという「人民」(p. 115)のや、小農という「人民」たちが、ルイ・プランとパリの労働者を裏切って、彼らを追放し、弾圧するだろう。

ある形で、パリの労働者の思想を代表していたプランの没落は、同時に労働者達の、国家と政治活動に対する絶望を意味する。かくして一八四八年以後の都市熟練労働者たちは、ますます反国家主義的になり、ブルードンの無政府主義か、プランキの一揆主義に傾いていったことは十分うなずけることである。(p. 164)

第五章「愛国者」では、彼の愛国者としての姿があつかわれていであるが、彼はインターナショナルリストではない、という意味で愛国者であった。われわれはここで、第一次大戦当時の、民主社会主義と排外主義の、皮肉な結合を想起するであろう。彼はフランスを専制と競争の解放者として、全ヨーロッパの社会主義化のない手と考えた。(p. 26) だが、それだけではない。彼は一種の帝国主義論をもっている。戦争は経済的必然性から起るのであり、資本主義あるかぎり戦争は不可避である。フランスはイギリス帝国主義に対して断乎と戦わねばならない。なぜなら、フランスはヒューマニズムの精神をもって植民地を支配するのであり、したがって植民地を手中に収める道徳的権利があるからなのである！(p. 27)

社会の中に二つの階級、ブルジョアと人民しかみないルイ・プラン、そして階級闘争ではなく、階級協調をとくルイ・プランは、労働者の国境をこえた連帯性をみいだすことができなかったのだ。

る。つまり彼は、フランス「人民」をみていたので、独自の階級としてのプロレタリアートをみる事ができず、したがって、その国際的連帯性を認めることもできなかったのだと思われる。

さて最後に、ルイ・ブランが、どんなタイプの社会主義者であったか、考えてみよう。第七章「革命家なき革命」においては、くりかえし、ブランや、その他の左派が、いかにそのエネルギーの源を、パリの労働者に求めていたかが強調されている。大革命の時と違って、彼らは、地方がパリについてこないであろうことをよく知り、かつ怖れていた。大革命の力の一つだった隷農は、今や小土地所有者になっていくからである。⑤⑥では、パリの労働者は、どういう階層によって構成されていたのだろうか。この点について著者は本格的な研究をしていないようである。だが、こういうことはいえないだろうか。ブランが頼った労働者、民衆は、近代的な組織労働者ではなかった、と。そういう意味で、彼は古い型の政治指導者の、おそらく最後の一人だったのでないだろうか。大革命の

時と同じように、パリ民衆の人気を唯一つの基盤として、決して組織の上ではなく、名声の上にもたがったリーダーだったと思われる。第十章「幻滅」にもそのことはうかがわれる。彼は下層中産階級も、労働者もひっくるめた「人民」⑤⑥、その政治的モップの上のみ乗っていたのである。第十一章「小さな巨人の没落」は、いかにブランが、自分を社会主義運動の人格化したものと考えていたかをよく浮きぼりにしている。彼は社会主義それ自体であり、彼の成功は社会主義の成功であり、彼の亡命はそのままジャコバン社会主義の、運動としての敗北なのであった。⑤⑦⑧

ルイ・ブランに関しては、長らく新しいモノグラフが途絶えていたと思われるが、当時の新聞をも十分使った、本格的な研究が現われたことはよろこばしい。単なる伝記以上のもの、ということができよう。

### 新刊紹介

ヘンダーソン、クオント共著

小宮隆太郎訳

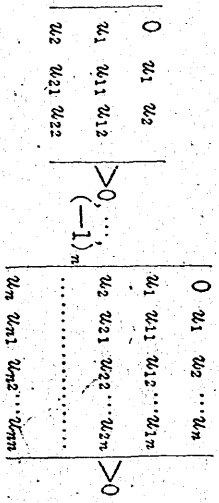
#### 『現代経済学』

——価格分析の理論——

本書は、James M. Henderson and Richard E. Quandt, *Microeconomic Theory: A Mathematical Approach*, McGraw-Hill, 1958. の邦訳である。原著の標題である「微視的経済理論」というのは、よく知られているように消費者や生産者の主体的行動から構成される市場の均衡の理論、一口に言って正統的な価格の理論のことであるが、そのような分析領域は巨視的所得理論が進展した今日においても依然としてきわめて重要なものであり、むしろ後者に對するケインズの功績が歴史のパスベクトイプの中に正しく位置づけられるにつれて、ますますその基礎的根拠性を再認識されつつあるように思われる。その意味で、「価格分析から所得分析へ」という一時わが国でも流行したスローガンほどその後の理論発展のコースを皮相に誤り印象づけ

るものはないのであって、われわれはサムエルソンとともに、所得分析に補強された「新古典的綜合の立場」が今日の支配的共通地盤であることを認めねばならないのである。このことはハーバードやオックスフォードなどのカリキュラムを見るならば、疑う余地のない明確な事実である。

さてこうした観点からして、本書の公刊をしてその邦訳書の方が国における公刊は、価格理論の秀れた中級教科書の資格において右の共通地盤の教課の上に多大の効用を發揮するであろうと考えられる。ここで中級と形容する所以は、一応幾何図形による説明はマスターしたが解析による説明は不可解という読者層に對して、本書はこの上なく懇切で信頼するに足る手引きを与えているからである。一例をあげていこうならば、消費者均衡理論で2財のとき無差別曲線が原点に對して凸という叙述なら分るが、同じことを一般にn財のとき、



と書かれるとどうも分らないというたぐいの読者のために、本書は周到な橋渡しを用意してくれているのである。

そのように、例えばヒックスの『価値と資本』の本文は分るがその重要な数学付録は分らないという人のために、またポールディングの『経済分析』は分るがサムエルソンの『経済分析の基礎』は分らないという人のために、当然あってしかるべきであった踏石を提供してくれること、それが本書のもっている最もユニークな意義であるといつてよい。近著中推薦に値する佳作である。(創文社、A5・四二頁・八〇〇円) 福岡正夫

篠原三代平著

#### 『日本経済の成長と循環』

本書は、著者篠原氏が比較的最近発表された日本経済の実証分析を内容とする諸論文を、書名の示すところにしたがって集録したものである。全体としての一貫性も十分保つよう整理されており、いわば氏のこれまでの研究の仮決算とみる事ができよう。本書の序文で著者は、「あたかも自然科学